

月報

50号

発行所

青丘文庫

編集・発行★韓 哲 職

〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2階

TEL(078)734-5989 FAX 735-0660

謹 賀 新 年

天安門事件、ベルリンの壁崩壊など象徴的な大津波が押し寄せ、世界史的な大転換期となった激動の年を送り、ある朝目覚めて見ると、三八度境界線に穴があいたといった、大変革を待望しつつ新しい年を迎えます。

青丘文庫の蔵書は昨年度も大幅に増加充実し、二一年目の新しい出版を致します。「在日朝鮮人運動史研究会」が一二年目の第一一八回、「朝鮮民族運動史研究会」は九年目の第九〇回、「日韓・在日キリスト教関係史研究会」が第四回目を迎え、「日報」もいつのまにか五〇号となり、記念として合本を出す計画でおります。

何卒本年も旧に倍する御協力を祈ってやみません。

一九九〇年

元旦

青丘文庫 韓 哲 職

朝鮮民族運動史研究会第80回報告(一九八九、十一、一九)

ロシア革命、シベリア戦争と在日朝鮮人社会

ヨーロッパ・ロシア、シベリアの朝鮮人社会と初期共産主義運動(1918-1920)

劉 孝 龍

ヨーロッパ・ロシア、シベリアには、1918年初の段階で、1・5万から2万にも及ぶ朝鮮人がいた。彼らの存在と活動は、在日朝鮮人の社会史、運動史の不可分の一部分をなすばかりでなく、共産主義的運動を含む植民地下における全体としての朝鮮民族運動にとっても大きな意味をもつものである。しかし、ソ連での研究を含めてこれまでの関連諸研究は、この社会の存在そのものにすら気づいておらず、多くの問題点を残している。

シベリア(バルカル湖以東の「極東」=極東ロシアを含まず)への朝鮮人の移住は、「日韓併合」以前からなされたが、規模は小さかった。移民の職業は商業が最も多く、その他に各種の建設従事者、煙草巻きなどの労働者もいた。そこに、1915年ころから大量の人々が満州、沿海州、朝鮮から戦時労働力としてシベリア、ヨーロッパ・ロシアの各地に送られ、苛酷な労働条件のもとで働くことになった。朝鮮人労働者が最も多くいたのは、アルハンゲリスク・ムルマンスク地方、ミンスク県戦線土工区、ベルミ其他ウラル地方などであった。

彼らにとって2月革命はほとんど意味のないものであった。臨時政府の戦争継続路線は彼らに労働力としていつづけることを要求したからである。十月革命の後、ソビエト政権は、彼らを含む外国人労働者の問題に関心をよせ、1918年3月17日「外国人労働者に関する労働人民委員部の決定」を出し、解決に乗り出した。しかし、直後に勃発した内戦、干渉戦はその実現をさまたげたのみならず、朝鮮人労働者をも戦争のあらしのなかに直接巻きこむこととなった。多くの朝鮮人は「国際主義」のもとに赤衛隊、赤軍に入り、一部は侵入した英軍などの人夫として使われることになったのである。

朝鮮人を糾合し、これをソビエト権力のほうに向かわせる役目は国民会が担っていた。米國に本部を置く大韓人国民会の派遣員李剛などによって、「併合」前からシベリア各地に広がっていた国民会は、大戦期の潜伏期をへて10月革命後ヨーロッパ・ロシアを中心として復活していた。ただし指導者の顔ぶれやメンバーの考え方は大きく変わっていた。

コミンテルン創立大会にも代表を送った国民会は、ソビエト政府の援助のもとで、1919年4月、モスクワで第一回在露朝鮮人労働者諸組織全ロシア大会を開催し、「労働政府軍」との対日共闘を決議し、「在露朝鮮民族労働者同盟」を組織した。3・1運動の知らせを受けて8月12日にはモスクワで「朝鮮の独立宣言のための集会」が開かれた。ここでソビエト政府はアビール「朝鮮の革命的組織国民会と全朝鮮人民へ」(1919、7、26付)を発し、対日共闘、対日戦線への参加をよびかけた。その推進のために朝鮮人中央執行委員会が組織された。

こうした彼らの活動が1919年11月にモスクワに到着した韓人社会党代表朴鎮淳などの一連の活動の前提、基盤になったことは明かである。即ち、極東ロシア、上海などでの朝鮮人の運動とソビエト中央ないしコミンテルンとを直接結ぶパイプはヨーロッパ・ロシアの朝鮮人であったのである。

この関係をさらに前進させ、対日共闘を一層本格化させるために、「シベリア解放」コルチヤーク体制の崩壊直後、朝鮮人中央執行委員会などはイルクーツクへの移転を決め、代表者を極東に派遣したりもした。しかし、この努力は「シベリア解放」と同時に自らの方針を変え、日本とたたかうことをやめたソビエト政権によって阻止され、イルクーツクを中心に創設が準備されていた中朝人混成の「東方赤軍」も解体させられてしまう。いわゆる「イルクーツク派」の形成がソビエト権力の強力な後援によって急速に進められるのは、普通いわれているように1919年以前では決してなく、上のような過程が一段落した1920年7月以後のことである。

日中戦争下、協和会の戦時協力について

――国防献金を中心として――

在日朝鮮人運動史研究會 第16回例会

松田利彦

1989.11.12

在日朝鮮人統制団体「協和会」は一九三六年以降、全国的に結成されていく。当時の情勢―日中戦争勃発以降の民衆動員体制の本格化―を背景に、協和会には「動員団体」の性格も付与されていた。本報告では、特に「国防献金」を中心に取り上げ考察した。

在日朝鮮人の国防献金額を、「社会運動の状況」各年版によつて見ていくと次のようにまとめられる。すなわち日中戦争勃発時は、献金額は大きいが、以後低減、中央協和会設立（一九三六・一一）の頃やや持ち直し、太平洋戦争勃発とともに献金額は増大、というのが、全般的な動向である。

各時期の特徴を見ていくと、まず日中戦争勃発直後の時期は、協和会の下部組織が整備されていなかった関係上、旧来の「融和系団体」が個別に献金を取り行ったようだ。献金額の大きかった京都府（協和会は一九三六年一月に結成）の例では、内鮮自助会、仏教報国会、等がそれに当たる。協和会の側はパン

フレットの配布・時局講演、といった宣伝活動に主に従事していたようだ。

次に、低迷期の献金状況を府県別に見ると、個人献金の方がおおむね団体献金より比重が大きかった。献金額の低迷の原因として推測されるのは、団体献金の場合、団体（会社等）の強制で自発的意志を伴わなかった点（福岡）、個人献金の場合、日中戦争の長期化の感寄せを在日朝鮮人が特に強く感じた点（神奈川県）、等である。また、同時期、在日朝鮮人が隣組、国防婦人会等のファシズム末端組織に組み込まれ、献金の強制が加重されたようでもある。一方、中央協和会の成立に伴い、宣伝も拡充された。

一九四〇年には、「紀元二千六百年」記念事業として軍用機献納運動が、中央協和会・府県協和会の主催で行われた。兵器購入資金を陸海軍省に寄付するもので実質的には国防献金に等しい。同年七月頃から始まったこの運動は、一二月献納の予定が遅れ、結局献納式は、翌四二年の五月となった。献納額は五〇万円で、陸海軍に五機ずつ「協和号」が献納された。この過程で中央から各府県へノルマを課した他、東京では、警視庁内鮮課が、在日朝鮮人中、有資産者の資産状況を調べていたと言

新図書案内

東方学志 第60号 延世大学国学研究院

王 仁 一伝説とその時代一 洪 相圭

朝鮮初期社会史資料 奴婢編 金 成俊

" 土地編 "

国 寶 ①古墳金属

" ②金銅仏・磨崖仏

" ③青磁・土器

" ④石仏

" ⑤工芸

" ⑥塔婆

" ⑦石造

" ⑧白磁・粉青沙器

" ⑨寺院建築

" ⑩絵画

" ⑪宮室建築

" ⑫書芸・典籍

韓 柄三

黄 寿永

崔 淳雨

黄 寿永

秦 弘燮

"

鄭 永鎬

鄭 良漢

申 栄勲

安 煥

申 栄勲

千 恵鳳

史 明

竹下 史郎

ソウル 同所 88年

" 韓日文化親善協会

" 嶺南大学 85年

" " "

東京 竹書房 P234 84年

" " P238 85年

" " P229 84年

" " P231 85年

" " P238 "

" " P240 84年

" " P285 85年

" " P223 "

" " P241 84年

" " P300 85年

" " P274 "

" " P301 "

台湾人四百年史

東京 音羽書房 P648

南洋群島教育史

" 青史社 P804

研究会御案内

〔在日朝鮮人運動史研究会〕第118回例会

日 時 1990年1月14日(日) PM2時

テーマ 在日韓国朝鮮人父母の民族教育意識の変化(10年前と比較して)

報告者 中島 智子氏

「書評」 堀内論文(金英寿氏)、長沢論文(平田氏)

〔朝鮮民族運動史研究会〕第90回例会

日 時 1990年1月21日(日) PM2時

テーマ 「一月書翰をめぐって」(1991年) 書評

報告者 金森 養作氏

評者 蔵田雅彦氏

〔日韓・在日キリスト教関係史研究会〕第4回例会

日 時 1990年1月27日(土) PM2時

テーマ 「日本帝国主義下の朝鮮伝道」を読む(1)

報告者 第一章・望月 智氏

☆場所はいずれも青丘文庫にて

第二章 梁 壽龍氏